

# 後継者問題を考える

## 中小企業向け「承継大学」開講

名古屋市

次の世代にバトンを渡せず、廃業や休業する中小企業が增える中、名古屋市は今年9月から、中小企業の後継者問題を考える講座

「なごや承継大学」を開講し、第1回は同市中村区の銭湯「地蔵湯」で行われた。今年2月定例会で銭湯の将来や公衆浴場の確保を取り上げ、対策を訴えた公明党の中村満市議がこの模様を視察した。

なごや承継大学は市が主催する「事業承継支援プロジェクト」の一環として来年の2月まで

講座終了後、地蔵湯の5代目、6代目と懇談する中村市議



で毎月開催される。この日は、1925年創業の地蔵湯に約50人が参加し、特別出演した落語家の2代目林家三平さんが、銭湯に設けた高座で落語を披露。続いて三平さんと、同湯を継いだ5代目の松本靖子さん、6代目で息子の政哉さんが、親族間での事業承継などについて語った。

この中で、三平さんは「襲名は宿命。自分の代でつづけてはいけないし、次の代につないでいかなければならない」と強調。その上で「親の代と同じことをして、いてはダメ。守るためには、新たなことに挑戦する攻めが不可欠」と訴えた。

一方、政哉さんは地蔵湯を受け継いだ理由について、幼少期から銭湯で働く両親の背中を見て、自然と自身が働く姿を重ねていた

ことを振り返った。靖子さんは「子どもに『継いで』と言葉にしたことはなかった。私も親に言われなかったが、誰かがやらないといけない」と自覚し受け継い

だ」と当時の心境を語った。視察を終えた中村市議は「事業を継がせる側と、承継する側の真剣な思いに、しっかりと応えていきたい」と述べた。